

四、第十五

であった。なお本文第一二五野戦飛行場設定隊の防諜号は、威第一五八三九部隊である。

ミンダナオ従軍回顧録

愛知県 大矢 昌 男

一、入 営

長兄は中国の除州より、次兄は東京より、姉は隣村より、それぞれ一家をあげて駆け付けてくれました。門には杉の葉でアーチをつくり「祝入営」と大書した額があげられ、「祝入営」の幟が飾られた。親戚知人・村人隣人など大勢きて、祝いの宴が開かれた。長兄が「我が家ではじめての入営だ、しっかり勤めてくれ」と激烈な口調のはげましの言葉、皆様より数々の激励の言葉を頂き、感激にむせび滅死奉公を誓いました。身はお国に捧げた体、生きては再びこの家のしきいはまたげぬ覚悟。骨もおそらく帰らぬものと思ひ髪は

毛と爪を切り、白紙につつみ、遺髪としたため母にわたした。「体をだいじにな」という母の目は泪に光っていた。叔父が私を部屋隅に呼び「命を大切に、必ず生きて帰れよ、これが本音だぞ」といった。

昭和十八年四月三日、出発の朝は村の鎮守の社に参拝、武運長久を祈り、大勢の村人の万歳の声に送られて三ヶ日駅に向かった。

三ヶ日町で、その日自分と同じ入営者が三人あったので、見送りの人・旗の波で埋めつくされていた。年の順で自分が挨拶をした。こんな大勢の前で話すことは初めてなのでちよつと緊張したが、まあまあ挨拶ができた。

歓呼の声や旗の波に送られ、列車はしだいに駅をはなれる。大勢の人波の中に母の顔だけがくつきりと浮かんでいる。だんだん小さくなって見えなくなるまでみつめていた。再び見ることも期しがたい故郷の山川、萬感胸にせまり目頭があつくなる思いであった。

広島に着いたら大勢の兵隊でごったがえしていた。初年兵受領の米山曹長のもつで、新しい軍服、靴など

一式の支給と、着脱、手入れなどの指導を受けた。靴がうまくあわないのでがやがや騒いでいたら「軍隊では靴を足にあわせるのではなく、足を靴に合わせるのだ。多少のことは我慢せい」といわれた。自分は小柄のほうなので小さめのを選んで、服も靴もだぶついていた。

輸送船を待つ間十日程、旅館に起居し、訓練を受けた。初年兵六〇名ほどのうち自分はいちばん背の低いように思えた。旅館のある町内の女子青年団の慰問を受け、そのとき娘さんの歌った歌が、今も印象に残っている。

風の家から 吹いてくる

沖のジャンクの 帆に吹く風よ

情けあるなら 教えておくれ

わたしの お姉さん何処にいる

あのとときの娘さんたちはどうなったやら、おそらく原爆で亡くなったことだろうか。

二、輸送船

昭和十八年四月十七日いよいよ乗船となる。宇品に

至り沖を眺めれば輸送船と思われる大きな船がみえる。ハシケに乗り沖の本船に向かった。本船は「三池丸」という。船は夕闇せまる中に出港した。しだいにうすれゆく陸地を眺め、これが内地との最後の別れかと万感胸にせまる。

我々兵隊は船倉を何段にも仕切った蚕棚のような所、上段との間は座高の高い者は頭がつかえるくらいの狭い所に押し込められた。船内は人いきれでむんむんする。飯あげのたびにこつたがえす。上から水がぼたぼたと落ちる。上でお茶か汁でもこぼしたのか、怒った下の者のどなり声等。蚕棚にぎっしりつまった兵隊は一銭五厘の貨物だ。

酒や甘味品など支給された。当時はそれは貴重なものであったので大喜びで甘党・から党、それぞれに飲みかつ食い、胃袋を満足させた。

二日目から三日目には船酔いと二日酔いで頭がガンガンし、嘔吐する。食事も咽をとおらず、しまいには黄色の水だけを吐くようになった。他の人々も皆ぐったりしていた。

四、五日してだいぶ船酔いにも慣れてきたが、船が南下するため暑さが日ごとに増し、船倉の換気わるく蒸し風呂のようで、皆半病人の状態だ。船の便所は甲板から横につきだした小屋に板張りで、真中は四角に切り抜いてある。下を見れば太平洋の荒波だ。船はゆるる風は吹きあげる足をふみはずしたらお陀仏だ。ひやひやしなからでは出るものも引つ込んでしまう。

敵潜水艦の出没ありとの報に警戒態勢に入る。船はジグザグ航海で進んでいく。非常訓練。気味悪いブザーの音に緊張感みなぎるなかに救命具をつけ甲板に避難する。どちらを見ても海ばかり、護衛艦なしの単独航海だ。ここで魚雷攻撃をうけたら一〇〇%お陀仏だ。後に聞いたことだが前の船はやられ後の船も沈んだとのこと、無事マニラに着いたことは幸運だったのだ。自分たちの「三池丸」も後の航海で沈んだとのこと。どちらを見ても青海原、飛魚が船と競うようについてくる。船は大きく上下に揺れる。それはエレベーターにのった時のように大きく上昇し、次にスウーと降下する。連続的に長時間繰り返されるのだからたまら

ない。みんな船酔いで嘔吐をこらえ半病人のようになって寝転んでいた。

一週間程でフィリピンの島々、絵や写真でみた椰子のある風景、憧れの南の国、はるばる遠くまできたものよなあ、と感慨無量なり。

三、マニラ上陸

いよいよマニラ上陸、重い軍装備で暑い日ざかりの行軍は、しんどいことだ。船酔いのせいかまだ体が揺れている感じがする。それにしても先輩たちは長途の船中生活の末、敵前上陸するのはいかに大変なことがろうかと思った。自分たちはケンソン大学の立派な校舎に入り、便船を待つ間訓練を受けた。南国の太陽が焼けつくように照りつけるなかで厳しい訓練を受けた。

夜も暑くて眠れない。やもりが天井や壁にへばりついている。よく落ちないものだ。便所は洋式だったので、(当時自分たちには初めての経験)とまどい、また下痢している者も多くあり、目もあてられぬほど汚してしまった。以後兵隊は、使用まかりならぬとの命令。野外に穴を掘り、板を二枚わたし、むしろで囲い

便所を急造した。暑いところなので、すぐ蛆がわき蠅がワーと不衛生この上ない。

日曜日に引率外出を許され、マニラ市街を見物した。甘いものに飢えていた時代だったので、甘党陣屋で食べた大福やまんじゅうのうまかったことを今も忘れられない。

一週間位して便船に乗る。今度は貨物船の古い船で船内は焼けるように熱い。船足はのろく各地島々に寄りながら貨物の積み卸しや、兵隊を各所属部隊におろしながら進んでいく。我々はセブ島に上陸し便船のくるのを待っていた。

「三ヶ日町の者がおるか」と呼ばれ上官の所にいくと、自分の村の尾藤源助さんよりの伝言を話してくれた。「今度こそは生還は期しがたい諸君の武運長久を祈る。もし生きて故郷にかえることができたならばよく伝えてくれ」といって、戦況急迫したニューギニア戦線に二日ほど前に向かったとのことでした。尾藤さんは高級将校で村の誇りで、我々の憧れの的だった。その後まもなくニューギニアで、名誉の戦死をされま

した。

数日後便船に乗り島々に寄りながらゆっくり進む。船が港に着く度に何処からともなく現地人のバンカー（小舟）がむらがつてきてバナナを手に高くふりかざして、「タバコ、タバコ、チェンジ、チェンジ」と呼んでいる。

甲板より水面までは四〜五メートルある。まずタバコを一箱落としてやると細いロープを投げ上げる。「タバコ、タバコ、チェンジ、チェンジ」と言いながらバナナを振ってみせる。ロープにタバコをゆわえて降ろすと、彼はバナナと結び替え「オケー、オケー」と言う。静かに釣り上げて取り引き終了となる。馴れてくると片言英語でジェスチャーでかけひきも出来るようになる。言葉が通じなくても何とかなるものだ。

昭和十八年五月十七日、待望のダバオ入港。ダバオは緑の中にある街だ。日本人も二万人ぐらいいいてマニラ麻の栽培やラワン材の切り出しなどやっていて小学校も幾つかあった。市街の北方二〇キロのテブンコ小学校に着き、そこを兵舎として厳しい初年兵教育が始

まった。

六時 起床 点呼、朝稽古

七時 朝食 食器洗い班内清掃

八時 教練 十時小休止、十二時まで教練

十二時 昼食 食器洗い、清掃洗濯、整理整頓など

一時 教練 五時まで訓練

五時 夕食 軍歌号令など練習 軍人勸諭の暗唱

点呼 その他の課目の教育訓練、
がおこなわれる。

答えがまずかかったり態度が悪いと、厳しく気合をい
れられる。軍隊はとくに機敏な動作が要求されるので、
のろいとピンピンとピンタを食らう。起床から消灯ま
で息つくまもなくしごかれる。

軍隊では体力がものをいう所(とくに歩兵では)だ。
自分は小柄なので同年兵の大きな体格をみると全くう
らやましく、時には劣等感を抱くこともあった。演習
では小柄な者は對抗軍(仮説敵)となつて、皆が攻め
てくる先に待っていて、石油缶をパンパンたたき(機
関銃のつもり)石灰をパッとまき(砲彈煙のつもり)、

皆がちかづくくとサッと逃げ、二〇〇メートルぐらい先
でまたパンパンたたき。なんだか子供のころの戦争ご
つこを思いだしおかしくなった。中に少しビッコの者
がいて、逃げおかれてつかまったなど(演習でよかつ
た)と笑う者があつたが、ビッコまで兵隊にとは……
本人の気持ちはどんなに悲しいことかと気の毒なこと
であつた。

課目が進むにつれ皆の目が鋭くなっている。頭のよ
いもの、体力の強いもの、動作機敏なもの、要領の良
いもの、それぞれ個性を出しきつて、厳しい訓練のな
かで精一杯頑張っている。

教官曰く「切磋琢磨、お互いに磨きあい、励ましあ
つていくべきだ」との訓示。それは激しいライバル意
識に燃え、競い合うことだ。熱帯地方の激しい炎天下
の行軍に倒れる者、はなはだしいときは入院、病死し
た人もあつた。自分も分隊別競争で目的地に着き、整
列したとたんあたりが急に暗くなり、頭がフワーとし
てきた。足をふんばりかろうじて体をささえた。一瞬
あたりは明るくなり、もとの景色にかえつた。解散の

令を聞き急いで木陰に入り休憩、やっともとの体になつた。もうすこしで倒れ、意識不明になるところであつた。死ぬときはこんなかなと思う、初めての経験であつた。

自分は体は小柄であつたが、健康にめぐまれ、行軍で落後したこともなく、演習を休んだこともなかつたので、一期の終わり近くに精勤賞として、ダバオに外地慰問にきていた「寿々木米若の浪曲」を聞きにいかせてもらい、「佐渡情話」をたつぷりと堪能した。

一期の査閲の近づいたころ、自分と黄倉の二人は、衛生兵教育のためダバオ病院に派遣を命ぜられた。小柄な自分は歩兵の訓練では、皆について行くだけで一杯。星数を望む気はさらにない。人殺しより人助けのほうが性にあつてると、内心嬉しかった。

当時としては人前で言えないことだが、これが本音。

四、ダバオ病院衛生兵教育

ダバオに各大隊より集まった初年兵は四〇人ほどであつた。病院の教育は歩兵に比べ肉体的には、楽な方であつた。班長、助教も温厚な方で良かった。

清掃、七時朝飯、八時（五分休憩）より十二時まで講堂にて教官の講義、昼食、一時から二時まで午睡、五時まで講義。夕食後科目の復習、助教より質問。

答が悪いと、厳しくしごかれる。とくに態度・動作ふるまひは厳しくしごかれる。点呼後自習。九時消灯。南国ダバオの暑い講堂に、かんづめになり一日中学科のつめこみ、暑いのと眠いので頭がボーとしてくる。ついこっくりとして晩の点呼前に、しぼられることになる。

土曜日は野外演習、毎日教室にばかりとじこめられている身にとつて野外に出ることは、楽しいことだつた。日曜日には外出を許され、ダバオ市内にいき班長に中華料理を奢つて貰つたこともある。また黄倉と二人で映画見物に行き、館内でピーナッツを食べているのを、上級者にもつかり、晩の点呼のとき顔が變形するほどピンタを貰つた。

その頃が一番よかつたと思う。食事も比較的よく、外出も時々許され、看護婦の姿もちらほらと目を楽しませる。

昭和十九年二月、修業式。教官、班長、助教より祝福と激励の言葉を受けた。後、宴会で大いに飲み楽しく食べた。残念なのは黄倉が体を悪くして入院、ともに喜びあうことが出来なかつたことだ。後日、病死と聞き胸をかきむしられる思いであつた。軍隊の宴会で安気に飲んだのはその時ぐらいのものであつた。

病院に別れをつけて原隊に復帰すべくダバオ師団司令部にて便船を待つ。待つこと久しく、ようやく小さな船でミサミスに向かつたのは二月末頃だつたと思う。途中、夜中に時化にあい船は木の葉のごとく揺れ、エンジンも止まり、いまにも沈没するかと思うほど大波に翻弄され、かなりの時間漂流していた。ようやく明けがたになって、船員の必死の努力によりエンジンの音を聞いたときは、やれやれ助かつたわいと胸をなでおろした。

ミサミスに着いた時は本隊はタンダクに出勤中であつた。本部医務室に勤務半月程後、糧秣輸送に同行して討伐に参加することになった。一昼夜ほど船に乗り、ある小さな湾に入りバンカーにのりかえて上陸した

(ダピタン)。

同期の小柳衛生兵とともに負傷者の手当を行い、便船にて後方に送る。そのとき初めてポンポンという銃声を聞き、いよいよ敵地に入る緊張感に身が引き締まる。

輸送隊は食料弾薬をのせた何台かの車を水牛に引かせた現地人と衛生兵・通信兵などで、戦闘兵力はわずかの人員しかない。ゲリラの出没する敵中をゆつくり進む。橋は落とされている、荷物を肩に幾度も往復して渡る。暑さと疲労のため行軍は遅々として進まず、ポンポンと銃声がある。護衛隊とゲリラとの打ち合いだ。そんな行軍が数日つづいてやつと本隊と合流したとたん、下痢と高熱に倒れてしまった。全く情けなかつた。頭はわれるほど痛い。お役に立てず皆に迷惑をかけることになって残念。

小さな教会に寝かされて、数日夢うつつの日が過ぎて。部隊は引き揚げとなり、重病人とて水牛の背に乗って帰る。頭はガンガン痛く、精神もうろうとして定かでない。かろうじてミサミスにたどり着き、中神軍

医の診断の結果カガヤン野戦病院に入院することになった。

二週間ほどで熱は下がったが体力が衰えていたので、なかなか退院は許されなかった。二カ月ほどしてようやく退院が許され、ミサミスに帰ったのは五月も末ごろだったと思う。大隊本部で医務室勤務しつつヒメネス行き便船を待った。ヒメネスに着き中隊復帰したのは六月上旬頃。中隊はタンダクに討伐中でわずかの留守隊で警備していた。状況が悪いから単独で歩かないようにと注意され、また先日分哨が襲撃された話しを聞き緊張感を深めた。二週間ぐらいいして本隊が帰り、やれ安心と思うのも束の間、三・四日後には転進命令がでてミサミスに集結した。

五、ミサミスよりサランガニへ移動

今度の討伐は大隊の大移動で、ゲリラ活動のはげしい地区を進むとのこと、容易ならざる空気に包まれていた。最後の会食に、竹内（予上）歌う「たれか故郷を思わざる」の歌声がいまも心に残っている。

夜中に船にてミサミスを出発、タンコブに向かい棧

橋にちかづいたトタンに一斉砲撃をうけ船は急旋回、為に船はかたむき今にも沈むかとヒヤヒヤした（友軍が確保していると思ひ込み）。幸にも船は復元し地上の友軍とともに敵を撃退して、ようやく上陸することが出来た。

それからは毎日、いや夜を日について（夜行軍が主だった）正に敵中突破。戦いつつ進み、進みつつ戦う。とくにサロク付近の戦闘は激しく、四中隊長戦死をはじめ多数の犠牲者を出した。雨に濡れての夜行軍、湿ったカンパンをかじりつつ前進、戦闘の繰り返し。時には鍋のなかにゲリラの飯が湯気をたてていることもあり、または逆に自分たちが状況の急変により、作りかけのおかずをほかつて、転進移動することもあった。ミサミスを出てよりセバノバラックまでは全く困難の連続であつた（別項敵中突破はその間の事を書いたものです）。

それからはゲリラの抵抗もなく行軍を続けようやくパカデアンに着いた。わずかにゲリラの抵抗を受けたが我方損害もなく進駐する。食糧が乏しいので椰子の

芽を食い、民間の床や塀などを薪にして数日滞在した。サランガニ警備の命令をうけたのはその時だった。

サランガニは、何もない所だとして、民家をこわしてトタンや床板などをはがし、建設材として船に積み込む。前に海をのぞむ丘陵地で景色の良いところで、平和であれば住みたいような所であった。そのバカデアンに別れをつけ、船でコタバトに上陸ここで三中队待ちあわせのため十日過ぎた。

六、炎熱下の悪路行軍

コタバトより川を二日ほど逆のぼり、それから毎日毎日炎熱の下、悪路を行軍だ。遙か遠くにうすぼんやり霞んでみえる山々、炎天つづきの毎日、あれを越えていくのだと聞くとうんざりしてくる。ようやくテゴスに着く。それより船で三昼夜ほどでサランガニに着いた。

七、サランガニ 警備

直ちにタコツボ掘りだ。不意にゴーという敵機の来襲いま掘りたてのタコツボに飛び込んだ。初めて爆弾や機銃掃射の洗礼をうけ正直のところこわかった。幸

い負傷者はなかったが、海軍の兵舎などが破壊された。さっそく裏山に洞窟を掘ることになった。それから毎日毎日横穴掘りが仕事だ。

空襲は日増しに激しくなった。そんなある晩、海軍側より「ハルマヘラ付近に敵船団を認めたり、明朝未明敵上陸の公算大なり」の情報あり、中隊長の緊迫した状況説明の後、恩賜の煙草をいただき、最後の酒を汲みかわして、暗夜の雨中へ悲壮な覚悟で出ていった。配置された所にタコツボを掘る。いよいよ最後か、明日このタコツボで散るのか。何とも言えぬ気持ち。小雨降る暗夜、黙々とタコツボを掘り続けた。

洞窟に帰りまんじりともせず、敵の上陸を今か今かと待つ。悲壮感、とても筆や口には言い現わせない。夜もしらじらと明けてきたが、敵のくる様子はない。全く明るくなったがその気配もない。何だか肩すかしをくったような、また一日生き延びたか。でもまだ油断は出来ない。ほっとした気持ちになつて、洞窟の前をみれば毛布や装具器具などドロコンコになつて目もあてられぬ有様。真つ暗な雨の中、緊急のこととて何も

かもそのまま出ていったのでこの有様、後始末が大変だった。

次の日も敵は姿は見せなかった。三日たっても十日たつても敵はこなかった。そうこうしているうちに、ダバオ警備の命令が下った。最後の所と心に決めたサランガニ、裏山に掘った横穴、そして悲壮な覚悟で掘ったタコツボ陣地、複雑な思いを残し雨中の道なき道をダバオに向かい、厳しい山越えの行軍は始まった。

八、サランガニよりダバオへ 山越えの行軍

四日分の食糧を支給され、前人未踏の山越しの行軍だ。もし予定以上の日数がかかれば全員飢え死ぬ可能性もある。一日目は茅の草原、五尺以上も延びた茅の原、行けども行けども茅の原、家は一軒も見当らぬ。小糠雨降る草原を大隊は延々と進む。

夕方になりようやく椰子ふきの小屋がある所に辿り着いた。体はびっしょり下着までぬれている。本日の工程は四〇キロ、雨の強行軍、自分は下痢していたので、ことさら疲労した。内地では狭い耕地を山の上まで耕しているのに、日光にも雨にも恵まれた肥沃な大

草原が、自然のまま放されているとは、なんとも勿体ないことだと思った。

二日目は山道にさしかかる。細い道を上がり下がり、つづら折に曲がりくねった道を、部隊はあえぎあえぎ登る。道はますます急坂となり、道らしい道は無くなり、溪流を歩く。滝があるとそこだけ迂回路を通り、また川の中を歩く。野性動物か山の部族の道とはこれであろうか、原始交通の原点を見る思いであった。

三日目になると山はさらに険しくなり、谷川はいよいよ狭くなり、水虫は痛くなる。川の中を歩くので、足の乾く間もなく全員水虫になり疲労は激しい。その日午後、山岳民族の男にあう。シラピオ（中隊使用人）の通訳で隊長との話しによれば「こんなに大勢の人はうまれて初めて見た。戦争のことなど全く知らない、頂上は近い」とのこと、これに力を得てみんな元気が出た。

次の日は谷川はわずかにその跡をとどめる位となり、山はいよいよ峻険となった所をよじ登る。やっと頂上にたどり着いた時は何ともいえぬ嬉しさであっ

た。あととは下りだけだと思つと急に元気になる。下りはわりあい楽に人家のある所にでた。道路も広くなつた。

しばらく行軍して、デゴスよりトラックに乗り、ダバオ北部のラパンダイに着く。やれやれと思う間も無く二、三日で一中隊はイシン警備の命令をうけ直ちに移動。

九、イシン警備

(十九年十月中頃より二十年五月初めまで)

イシンはダバオ北東三九キロ地点、小さな川をはさんでゲリラと対峙する最前線で三叉路になつた重要地点である。橋は当然落としてある。付近は湿地帯のジヤングル、高温多湿、衛生環境は非常に悪く、加えて食糧事情も悪化し、芋、かぼちゃ、とうもろこしばかり。マラリア・下痢・悪性の皮膚病に病んだ。

その頃現地入営や緊急補充員などもきて人数は増えたが、体力の無いものが多数あり、思うような教育訓練は出来ないと教育係はばやいていた。

戦況悪化とともにゲリラの動きが活発となり、敵機

の空襲も激しくなってきた。その中で度々の討伐、敵の襲撃、いく度かの激しい戦闘、尊敬していた田中少尉はじめ多数の戦友の戦死。終いには分隊の小屋も医務室の小屋も爆撃で吹き飛びやむなく一キロ程後方。パナポに部隊を移し、分哨を守るダバオ右岸に米軍来襲により転進命令がでるまでは一中隊の手によりイシン川の線は死守されていたのだ。自分にとってイシンは最も思い出深い所である。

一〇、米軍との戦闘(昭和二十年五月上旬)

ダバオ川右岸に米軍来襲、戦況重大なり、直ちに右岸の米軍との戦闘に向かう。圧倒的物量と機動力に勝る米軍の前に、味方の苦戦筆舌につくせず。砲煙弾雨ひっきりなし、地獄のなかの火の雨か、自分は負傷者の応急処置に、戦死者の遺骨収容・無我夢中だった。

戦死者の遺体収容もままならず、やむなく片腕だけ、後には手首または小指だけを遺骨として、収容した。また砲弾で跡形もなく、吹き飛ぶ者もありこの世の地獄さながらであった。あまりにも多数であり、部隊は出撃・転進と絶えず移動しているので、何処であった

か、誰であつたか、申し訳ないとは思うけど、はつきりとは思ひ出せない。

ただ夢のように戦死した戦友の顔が、浮かんだり沈んだりしている。制空権を敵に握られ近代兵器の物量の前、日本魂もいかんともしがたく、じりじりと山際に追い詰められた。激しい戦闘で多数の戦死を出し中隊の人員はわずかになった。本部・友軍との連絡も絶えてきた。それからは、山奥の道なき道をあえぎあえぎ、尾根をこえ谷に下りまた尾根に登り、奥へ奥へと、落ちのびた。

やせ細り目だけギョロギョロ口足もとふらふら、二ヵ月も米はろくに食べていないものばかり、特に悲惨なのは邦人難民、死んだ母親の乳房にしがみつき、やせ細った赤子が泣いている様、なにか食べ物をと訴える老婆、虚ろな目をして半分死んだような人。死体となつて蠅や蛆のたかっている人、兵隊といわず邦人といわず明日の命は風前の灯。

疲労した体に鞭うって、至上命令である本部追及のため、山奥へ奥へと向かった。苦難のすえやつと連絡

が付いたが食料の支給はまったく無い。自活体制にはいるとて、また山中を移動、ウピアンに着いても食べ物はずっと無く、また転進移動、体力は限界までに衰弱。このままでは餓死は明白だ。

切り込み隊の名目の一隊が山を下ると、続いて五人、一〇人と、ばらばらに山を下る。その道中の惨たらしさ、五〇メートル位に死体となつて道ばたに横たわっている。悪臭ふんぶん、蠅が真つ黒にたかり、蛆がわいている者、虚ろな目をわずかに開き、いまにも死にそうなる者、すでに白骨となつたもの。全くこの世のものとは思われない有様だつた。明日は自分の姿かと思いでくつとする。ともに山を下つた幾人かが遅れ、中隊長と当番の升島と自分の三人だけになった時もあった。福田軍曹・増田曹長・富沢が順次加わり六人で下つた。

皆栄養失調、足元はふらふら、幾日か歩いて、平地にでた。幸い付近にカモテカホイ（木の芋）があり、小川も流れている。六人で天幕を張り、そこを本拠として自活体制に入る。それからは毎日食料さがしに明

け暮れる。トタンに穴を開け、おろし金としカモテカ
ホイをすりおろし、団子にして焼いたり塩汁に入れ、
すいとんにして食べた。時には生焼けのままたべて、
頭がポーとしたこともあった。

ある晩一〇メートルくらい離れた仮便所に行き、帰
ろうとして立ち上がったら急に、テントの火が見えな
く真の闇となり、方向がわからず、しばらくポーと立
ち尽くしていた。そのうち少しずつ見えるようになり、
ほっと安堵した。栄養失調が目にしたものと思う。

一一、終戦のビラ

昭和二十年八月十七日、飛行機より無条件降伏のビ
ラがまかれた。隊長はデマだ謀略だといった。そうい
えばここ二日ばかり爆撃もなければ、砲弾の音もしな
い。信じられない、いや真実かも知れない。複雑に心
は揺れ動く。いつたいこの戦いは何だったんだらう。
その後各隊との連絡もとれ、ほんとだと思おうようにな
った。投降したらオーストラリアに送られ、強制労働
だとかいろいろのデマが飛ぶ。

九月になってから情報も確かなものとなり、部隊命

令が出て収容所に向かったのは、二十日頃と記憶して
いる。

車の通る路まで出るとジープが来た。先ず武装解除。
命より大切にしていた三八式歩兵銃を無造作に車に放
り込む。その上に自分たちが、詰め込まれる。銃を踏
み付ける、なんともやり切れない。その夜、途中一泊
し、明るる日ダリヤオン収容所に着いた。

広い草原をブルドーザーでならし鉄条網で囲ってあ
る。ポロポロの敗残兵が続々と、投降してくる。将校
・下士官兵・邦人と分けられる。

各部隊ごちゃまぜとなり、簡単な取調べをうけて持
ち物被服など全部捨てさせてアメリカ中古服を支給さ
れた。二〇人ずつに区分され、上級下士官が室長とな
りテントの組み立てをする。下は土のままなので、ダ
ンポールなどを敷きその上に寝る。

一二、収容所の生活

収容所は草原の中にあつた。黒人兵がブルドーザー
で整地している。初めて見るブルの威力は当時の自分
には驚異であつた。いままでの草原が見る間に、広い

グラウンドのように整地され、椰子の木で杭をたて鉄条網で囲う。テントが運び込まれる。千人ぐらいの収容所があつという間に出来上がる。

部隊命令で毎日千人ぐらいの兵隊や邦人が山から下つて来るのを、混乱なくてきばきと処理する米軍の物量と機械力に驚いた。隣の囲いは中古衣料の集積所で衣料が屋根より高く積み上げられていた。その整理のため使役に駆り出されたときなどは半ズボンで行き、帰りはジバンや上着など身につけてくる。みんなそうして衣料を増やしていく。監視の兵も見てみぬふりしている。

食事は毎朝折り詰形の箱で一日分が支給される。横文字の分からぬ我々は絵で朝飯、昼飯、夕飯と判断する。中身は主食たるパンは少したがチーズ、ビスケット、コーヒーパウダー、たばこまで付いていた。珍しいおいしい物であった。これでも米軍の非常食だそうだが、油紙でしっかり包装され、雨にも暑さにも変質しない、日本軍のカンパンと比べ雲泥の差だ。

便所についてはちよつと戸惑う。ドラムカンを井戸

のように深く埋めたものを幾つか一列にならべて、道板を置く。囲い無し、野天に尻を出して用を足す。かつこ悪いことこの上無し。夕方ガソリンを掛けて焼くので蠅はわかない。

数日して水道が引かれて、洗濯やシャワーが自由にできるようになった。山からシラミだらけで投降した我々は、シャワーとシラミ潰しが日課だ。毎日テント回りの清掃。時々、使役に行くぐらいで、後はシャワーと洗濯・シラミ潰しが仕事だ。捕虜の待遇としては上々だと思つた。後日シベリア抑留者の話を聞き、捕虜生活においては自分等はずいぶん恵まれたほうだと、思つた。

収容所の中も社会の縮図だ。いろいろの人がいておもしろい。たばこが銭の代わりとなり物々交換だ。甘味の好きなもの・煙草に目の無いもの衣料を集める人（寒い国の人）など、それらの人々の間を回り、たばこ何本何本！と商談成立させるブローカーもいる。

使役にも時々いった。これは運で当たりはずれが大きい。あるときは船倉の中で貨物の整理、クレーンに

吊るされた網の中の多量の箱がバラバラと落とされる。急いで隅の方から整頓よく積み上げる。ピリピリと笛の音で退避、次の貨物が落とされる笛を合図にまた積み上げる。この繰り返し。一晩中、米兵にハイハイと急ぎ立てられてヘトヘトになった。

ある時は浜辺にローラーレールを敷き、馬鈴薯の大箱を押して陸揚げする仕事、フィリピン兵にシゲナーシゲナー（早く々）と急ぎ立てられ、立場の逆転なんとも悔しかった。またある時は空のドラムカンを移動する仕事、僅か一〇メートル位の距離を低床トラックに積みゆつくり運ぶ。少ししては休む。日本語の少し分かる米兵で、ジェスチャーまじりでの会話が面白い。日の丸の旗を欲しがっていた。記念に持ち帰るのだという。

被服整理使役、山のように積み上げられた衣料、上衣ズボン、ジバン、カバン、シートハンモックなどそれぞれに仕分けする。半裸に近い服装で行き、夕方にはいろいろ着こんで帰る。監視兵は知らん振りしている。さすが持てる国、おおようなものだ。

収容所には邦人の兵隊二万人ぐらいいるそうだ。オーストラリアに連行され強制労働にされるとか、いろいろなデマが飛ぶ。

情報は何も無い、原爆と東條のピストル自殺のことを米兵のジェスチャーで知る程度、本当のことは何も分からない。まな板の鯉だ、先のことは何も分からない、考えたとしてどうなるものでなし、考えないことにする。

とは思えども、夜、星空を眺めては故郷のこと、激しかった戦闘、山中の地獄、戦死した友、いろいろと頭に浮かんでくる。あ、早く帰りたい。

【解 説】

執筆者の所属部隊は第一〇〇師団（拠）（元独立混成第三十旅団）の歩兵第七十五旅団、独立歩兵第一六四大隊第一中隊である。編成からは、第十四方面軍、第三十五軍の隷下部隊であり、所在はフィリピンのミンダナオ島で、司令部はタモンガンであった。

第十四方面軍というとフィリピン方面軍のことで、戦争末期には連合軍が上陸し、レイテ戦は日本軍の天

王山といわれ、大本営も陸海共に全力を比島戦に投入したのである。レイテ、ルソン、セブと逐次侵入した連合軍は、西部ニューギニア、フィリピン両面よりミンダナオ島に上陸を開始したのである。

昭和二十年四月中旬、ミンダナオ島にはダバオ平地に第百師団（四月下旬以降、海軍の第三十二特別根拠地隊を併せ指揮）が、中部地区に第三十師団（豹）、西部地区に独立混成第五十四旅団（萩）が配置されていた。

敵は四月十四日、中部のコタバト付近に上陸し、我が海岸守備隊を圧迫して内地地に向い進撃を開始した。

その時、第三十五軍参謀長は「侵入する敵の撃滅に努め己むを得ざるもダバオ西方地区に複郭陣地を構成して敵戦力の漸減を図る」との方針を軍司令官命で作戦指導をした。

第百師団はダバオ西方台地の既設陣地により約二ヵ月に亘って頑強に防御戦闘を実施した。ダバオには在留邦人が約一万五〇〇〇人おり、この保護も大きな任

務であり、六月以後にはダバオ西方のアポ山の北に構築した複郭陣地に入った。

執筆者も「最後は戦闘しつつ奥へ奥へと約二五キロの道に入り、部隊編成は逐次分散し、後日小集団としバラバラに行動した」と述懐されている。

第三十師団は、ダバオ北方内地地のマラバイ東方陣地で抗戦したが、食糧補給も無く、自活態勢に移るべく大原始林地帯を通過して八月初旬、東方ワロエ付近に移動した。また、独混第五十四旅団はザンボアンガ（西端）に上陸した敵と激戦を交え、約二、〇〇〇名の損害を出した後遊撃戦に入った。

また、第二飛行師団司令部は第三航空軍司令官の指揮下に入り、五月シンガポールに転進した。

厚生省の遺骨収集団の報告によれば、ミンダナオ地区のミンタル河洞窟、タモガン河洞窟及びキロロン、バース、マリワン等のジャングル内等から六〇〇柱、昭和四十四年十一月からの派遣班はダバオ地区から三七〇柱、その他各地区から多数の御遺骨が収集されている。

いづれにしてもフィリピン各地では、今次大戦において五一万八〇〇〇人という、最多の戦没者を出している。ミンダナオにおいては戦争末期、在留邦人を含め悲惨な状況を呈し、生命を保持するための飢餓と病魔との戦いであり、遺骨も山中ジャングルや蝸壺陣から多数収集されている。